

スポーツ障害

座長：鈴 江 直 人

このセッションでは、小児のスポーツ障害について、疫学、治療法を中心に検討を行った。

スポーツ傷害は、外傷(いわゆるケガ)と障害(故障)に大別できるが、多くの場合、オーバーユースによって引き起こされる障害が問題となることが多い。骨格の完成した成人と、成長期の小児とは同じオーバーユースでも障害される部位が違っており、小児では未熟な骨軟骨が損傷されやすいことが特徴である。

国民的スポーツである野球においては骨軟骨障害の1つとして肘関節離断性骨軟骨炎が挙げられる。この障害は重症度が高く、場合によっては将来に重篤な影響を及ぼすことから学会等でも頻繁に論じられている。今回のセッションでは骨釘を用いた手術療法が検討された。

また小児に発生した疲労骨折についての検討も行われた。成人に比較すると発生率は決して高くはないと思われるが、一定数は必ず存在しており、注意が必要である。

膝関節はスポーツによって障害されることが多い部位であるが、前十字靭帯損傷や半月板損傷、骨折といった外傷も多くみられる関節である。こういったスポーツ傷害による膝関節の手術には関節鏡が用いられることが多く、治療および診断に対する有用性が検討された。